

学道一如

発行 高校
小樽双葉通信
生徒会 2024年5月22日
第12号

特集▼小樽再発見(12)高野宏康先生

過去の記憶を未来に紡ぐ



小樽の歴史・文化を掘り起こし、まちづくりに活かす取り組みに学術的に取り組み、発信している高野宏康先生を訪ね、お話を聞いた。

小樽商大客員研究員

高野宏康さん(50歳)

石川県加賀市生まれ。明治大学卒業後、2008年神奈川県立北前船の研究所に勤務。北前船の研究や遺産を活用した地域活性化事業に取り組み。専門は歴史学と地域資源論。
地域レジリエンス株式会社・代表取締役。

歴史は資源、活かせる

●先生は歴史学と地域資源論が専門と聞きました。普通の歴史学ではやらないことに取り組みでおられるそうですね。

普通の歴史学なら、対象をただ研究すればよいのですが、地域資源論の観点からは、対象(「資源」)を活用することが重要になります。小樽には人口減少などの課題がありますが、課題解決、地域活性化のためには

過去を紐解くことが大切です。資料から学ぶ歴史学が、観光やまち作りにつながるのです。

私は石川県加賀市出身ですが、小樽とは北前船で繋がっています。故郷の橋立町は北前船の船主の町で、船は小樽に寄港していました。小樽に今も残る倉庫群はその時代の名残です。私の親の世代は船主の屋敷を歴史遺産として残す活動をしてまち興しをしていました。私は10年前

に小樽に生まれましたが、北前船を通じて故郷とのつながりや歴史的建造物を活かす意義を感じています。

物語性を大切に

●小樽商大についても教えてください。

小樽商大は商学部の単科大学ですが、学問を地域に活かすことが求められる学風があります。10年前ですが、NHKの朝ドラで「マツサン」が放映された後、モデルとなった竹鶴政孝・リタ夫妻のことを調べることになり、その研究を広域観光に活かすことができました。聞き取り調査から、夫妻が余市から小樽に来て、どこに立ち寄ったのか、小樽との繋がりが見えてきました。たとえば、リタさんのレシピを活かしたブライディングケーキをキャトリエムさん(洋菓子店)に商品化してもらい、二人の小樽での足跡をたどるツアーの実

施などに取り組んだところ、大きな反響がありました。これは小樽に来て、歴史を資源として活かす最初の取り組みになったと思います。

このように背景にある物語やエピソードを知れば、親しみが付き、見に行きたいという動機付けになる。物語性が大事です。

石造倉庫は北前船の遺産

●北前船の研究について教えてください。

北前船とは江戸時代中期に発展した本州と北海道をつなぐ商船のことで、北海道からは昆布や肥料用の練かすを、本州からは北海道では手に入らなかった生活物資(米、味噌、醤油など)を運びました。小樽の石造倉庫はその歴史遺産として利活用されています。

小樽の神社には船の安全を祈願する絵馬が奉納されています。船が精緻に描写され、歴史資料

として重要です。鮮やかな色彩で描かれており、美術品としても魅力があります。現在、恵美須神社(2面)、龍徳寺金比羅殿(8面)、徳源寺龍神堂(3面)、塩谷神社(30面)の船絵馬が日本遺産構成文化財に認定されています。

昆布は奥が深い

●昆布文化について教えてください。

昆布は日本食で出汁を取るのには欠かせない食材です。また、アジアでは漢方に使う医薬品でもありました。2年前にベルサイユ宮殿で北前船のフォーラムを開催しましたが、そうした面でも大きな反響がありました。

小樽を日本遺産に

●「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽」の日本遺産認定の構想について教えてください。

「北海道の『心臓』と呼ばれたまち」という表現は小林多喜二の文章から引用したものです。

小樽の歴史のキーワード 北前船



(源徳寺龍神宮の絵馬)

江戸時代中期から明治30年代にかけて、北海道と大阪を主に日本海回りで往来した商船群は『北前船』と呼ばれ、「動く総合商社」と形容されるほど、その富は莫大なものでした。明治2年に開拓使が設置されると、小樽には各地から移民が押し寄せ、人口が急増します。小樽港は、交易品と移民たちの生活物資を運ぶ北前船の重要な寄港地として発展を遂げ、北前船主たちによって大規模な倉庫などが次々と建造されます。社交場として賑わう料亭、大きな商家や蔵、神社仏閣への奉納物など、北前船を取り巻く人たちによって街が築かれていきました。

日本海の荒波を越え、一攫千金を夢見た男たちが、人・物・文化を運んだ『北前船』は、北海道にやってきた人たちの生活を支え、小樽の発展の基礎をつくったと言えるのです。(日本遺産「北前船」小樽市の構成文化財・周遊マップより)

日本遺産を説明するのにはストーリーが大事です。小樽の人が自分たちのまちを説明できるようにするために、まちの物語を作ることに意義があります。文化財にまつわる物語を発掘するという事です。認定のためには、何か取り組みをしていること、文化財が活用されていることが求められます。日本ではこれまで104箇所の日産遺産が認定されており、現在の候補地域は3箇所です。認定については、文化庁にこれまでの実績をアピールできれば可能だと思います。看板などの掲示物を複数の言語で表記することも求められます。小樽にはこれまで、運河や旧手宮線を活かした小樽雪あかりの路など、様々なイベントを行ってきた実績がありますから。

まちの人の話を聞くことから

●先生のご研究はまちの人のつながりを大切にされていると想像しますが、小樽に移られてからどのように人脈を築いてこられましたか。

民俗学が好きで、大学院で研究してきました。まちの人の暮らしぶりを知り、人から話を聞くのは大切です。たとえば、まちの中のお店、飲食店には歴史があり、訪ねていくとそれを体感できます。大学では「小樽の人に学ぶ」という講義で学生に、地域の事業者に聞き取りをしてもらったこともあります。

観光船・屋形船の活用を

●小樽港の歴史とこれからについて教えてください。

小樽駅は駅から港が見えますし、北防波堤が見えます。こんなところは他にはない、まさに地域資源です。最近では第三埠頭に大型客船が停泊できるようになり、「みなとオアシス」の登録を受け、ニュースになりましたね。

港については、今後、観光船や屋形船をもっと活用すべきだと思います。観光船「あおぼと」に乗って、祝津で美味しい海産物を食べて戻るといった旅行プランもいいと思います。

新日本海フェリーの航路ももっと活用されていいでしょう。昨夏、北前船子どもフェリー使節団が、新潟や石川県を訪問し、良い経験ができました。

港ではありませんが、旧手宮線も貴重な資源です。廃線後も線路が残って歩けるところは滅多になく、貴重です。この施設

商大生のカフェ盛況

●小樽商大の学生さんが運営するカフェについて教えてください。

学生が会社を作り、運営している嶋谷カフェ(色内1丁目2-18) (上写真)はHPを作り、商品開発もしています。

品開発もしています。

地域資源である石造倉庫の活用です。地域には知らない間に取り壊されている倉庫がかなりありますよ。

関心のあることを掘り下げて物事を捉える視点を大事に

●先生は高校・大学時代、どんな学生でしたか。高校生へのアドバイスがあれば、お願いします。

常に机に向かって勉強するといふより、好奇心旺盛で調べるのが好きでした。高校時代はカヌー部に入っていました。大学では地中海沿岸、ギリシャやエジプトなどの歴史や文化に関心をもち、吉村作治先生について、エジプトの発掘調査に関わったこともあります。海外のエキゾチックなものに関心がありました。そんな中、大学3年の時、歴史学者・網野善彦先生の講演を聞き、日本海沿岸の交易や職人の世界の面白さに触れ、そこから日本に研究を移すことになりました。網野先生が創設した大学院に所属する傍ら、個人指導の塾で長く教えていましたが、



地域資源で品開発もしています。



(取材場所・上写真)は「ルーウェイ」という名前で、労働組合の事務所を改装したものです。旧手宮線の利活用に役立たいという意図もあります。

ある時、中学生に「先生これからどうするの」と聞かれ、博士論文に真剣に取り組み始めました。テーマは「江戸時代に北前船の交易で繁栄した日本海が近代以降に『裏日本化』していく過程の意識や社会の変化について」です。

高校生へのアドバイスとしては、関心のあることを掘り下げてほしいです。

また、物事を捉える視点を大事にしてほしい。長く小樽に住んでいると気付かないことが多々あると思いますが、色々な見方ができるんです。たとえば、銭函の印象はどうでしょう。海水浴と漁業の町、ひなびたところと思われていましたが、今や「北の湘南」として注目され、おしゃれな店が建ち並ぶようになりましたね。

ダークツーリズムの意義

●関東大震災の研究もされていますね。

東日本大震災後、災害史について調査する意義が見直されてきました。大学院時代、災害史研究の第一人者・北原糸子先生のプロジェクトに参加し、関東大震災の資料調査研究をしました。関東大震災には2つの側面があります。東京は壊滅的な状態になり、多くの命が犠牲になりましたが、後藤新平が復興を指揮し、新しい都市が造られたこと。もう一つは、デマにより朝鮮人・

中国人の虐殺が起こったという負の歴史の側面です。歴史の両面が大事なんです。

小樽の日本遺産認定のテーマに「北海道の『心臓』と呼ばれたまち」という表現があります。小林多喜二の文章から採っている表現で、小樽は社会運動が盛んなまちであったという歴史、観光だけではない、歴史や文化を思い起こすという意味も込められています。

高島に特攻隧道(小樽海軍特攻隊基地)があったことを知っていますか。戦時中、高島岬の洞窟には特攻用の小船の出撃基地がありました。小船はベニヤ板で作られ、250キロの爆弾を搭載して、敵船に体当たりしていたのです。ここは戦争遺産マップにも掲載されています。こういった負の遺産巡りをダーク・ツーリズムと言いますが、これも地域の魅力を知るために意義があります。

関東大震災の調査では、まちの人への聞き取りをして、震災の記憶集めることの大切さも知りました。こうした経験から、歴史を研究して論文を書くだけでなく、資料の整理保存を行い公開に結び付け、さらに多くの人たちに知ってもらうため、地域のひとと協力しながら色々なことに取り組む。そこまで含めて行うことが歴史学の仕事だと思っています。

